

# 現実はいかにして可能か - インドネシア、レンボガン島の事例より -

重森 誠仁

北九州大学文学部人間関係学科

## 要 旨

インドネシアには呪術や薬草を用いて病気を治す呪術師がいる。彼らはインドネシア語でドゥクンと呼ばれている。インドネシア27州のうちの1つであるバリにもドゥクンがいる。バリ島の南東に位置するレンボガン島には、ブヌグラハン・スチ・シワ・ブダツ(penugrahan suci siwa budha)という組織を設立し、村の若者たちに呪術を教え、サクティという超自然的な力を用いて病人を治療しているワヤン・タンカスというドゥクンがいる。

サクティとは「人の体に電池のように蓄積できる呪的エネルギー」である。人によってその質や量が異なり、呪術と瞑想の技法を体系的に学ぶことではじめて制御可能なものになるとされる。

日本において、呪術という言葉はある種のいかがわしさを連想させるが、レンボガン島民にとって呪術は日常的なものであり、実際に喧嘩や病気治療の際に使うことができる実用的なものである。

本論文では、レンボガン島のドゥクンであるワヤン・タンカスの組織に焦点をあて、そこで行われている超自然的な力サクティを巡る営みをもとに、呪術についての分析を試みる。

呪術はともすれば単なる虚構と見なされがちである。しかし、本論文において「現実とは虚構から作られること」、さらに踏み込んで言えば「現実とは虚構そのものであること」が明らかになる。現実(リアリティ)をつむぐ(作る)際に重要となるのは臨場感(体感)であり、呪術師は身体を伴った卓越した演出によりそれらを醸し出している。そして、呪術師とは現実(虚構)を自ら作りだし、かつ作り出された現実(虚構)に自ら進んで呪縛されることができる人間を指すのである。

## 目 次

はじめに

第一章 インドネシア、バリ、レンボガン島の概要

第一節 インドネシア

第二節 バリ

第三節 レンボガン

第二章 呪術師の家

第一節 インドネシアの呪術師

第二節 呪術師ワヤン・タンカスのライフヒストリ

—

第三節 呪術を学ぶ集団

第四節 インドネシアの土着宗教クパティナン

第三章 サクティという現実

第一節 サクティの起源

第二節 病気治療の場におけるサクティ

第三節 サクティを巡る実践と言説

第四章 考察

第一節 呪術に関する先行研究

第二節 現実の作り方

第三節 呪縛

第五章 結語

第一節 バリにおける現実

第二節 今後の課題

謝辞

註

引用文献

はじめに

インドネシアには呪術や薬草を用いて病気を治す呪術師がいる。彼らはインドネシア語でドゥクンと呼ばれている。

呪術はインドネシア語でイルム(ilmu)と訳すことができる。インドネシアにおいて、イルムは何らかの秩序だった知識の体系を意味し、現象を操作しかつ世界に働きかけるための技術とされる。

ドゥクンはイルムの知識に長けたものであり、彼らの病気治療はイルムの知識に基づいて行われている。しかし、イルムの知識は使い方によっては人を病気に陥れる邪術にもなりうるため、インドネシアの人々はドゥクンに対し畏敬の念を抱いている。

インドネシア27州のうちの1つであるバリにもドゥクンがいる。バリ島の南東に位置するレンボガン島には村の若者たちに呪術を教え、サクティという超自然的な力を用いて病人を治療しているワヤン・タンカスというドゥクンがいる。

サクティとは、「人の体に電池のように蓄積できる呪いのエネルギー」である（ミゲル・コバルビアス 1992：337）。人によってその質や量が異なり、呪術と瞑想の技法を体系的に学ぶことではじめて制御可能なものになるとされる。そして、その能力に優れた者だけが呪医や祭司になれるという（ミゲル・コバルビアス 1992：337）。

ワヤン・タンカスは2000年の1月にプヌグラハン・スチ・シワ・ブダツ(penugrahan suci siwa budha)という組織を設立している。そこでは毎晩、サクティを用いた病気治療がなされ、タンカスによる呪術の技法の伝授が行われている。

日本において、呪術という言葉はある種のいかわしさを連想させる。しかし、レンボガン島民にとって呪術は日常的なものであり、実際に喧嘩や病気治療の際に使うことができる実用的なものである。

本論文では、レンボガン島のドゥクンであるワヤン・タンカスの組織に焦点をあて、そこで行われている超自然的な力サクティを巡る営みをもとに、呪術についての分析を試みる。

呪術はともすれば単なる虚構と見なされがちである。しかし、本論文において「現実

は虚構そのものであること」が明らかになる。現実（リアリティ）をつむぐ（作る）際に重要となるのは臨場感（体感）であり、呪術師は身体を伴った卓越した演出によりそれらを醸し出している。そして、呪術師とはひとつの現実（虚構）を自ら作りだし、かつ作り出された現実（虚構）に自ら進んで呪縛されることができる人間を指すのである。

なお、本論文で用いるデータは2000年2月24日から3月13日までの19日間にわたる予備調査と、同年6月13日から8月11日までの60日間にわたる本調査に基づくものである。筆者は呪術師タンカスの弟子として彼の家に合計32日間通い、サクティの技法を観察し、かつ実践した。

## 第一章 インドネシア、バリ、レンボガン

### 第一節 インドネシア

インドネシア共和国は、赤道をはさみ南北1900キロメートル、東西5200キロメートルの範囲に13600もの島々を内包する島嶼国家である[図1]。国土面積は1919443平方キロメートルで、日本の約5.1倍の広さである（井上 1995：46）。総人口は約2億人であり、人口規模では世界第4位の国である（小池 1998：10）。

公用語としてマレー語をもとにして作られたインドネシア語が使われている。しかし、インドネシアは様々な民族と言語が入り乱れた多民族国家である。インドネシアの島々のうち、人が居住している3000あまりの島々には、約300の民族集団とおよそ250の言語が存在している（倉田 1995：82）。

歴史的に見ると、インドネシアは紀元前からイ

ンドの影響を受けている(小池 1998:18)、東カリマンタンのクタイで発見されたムーラワルマン王国の遺跡には、サンスクリット文字を使用した碑文が残っており、5世紀には既にヒンドゥー教を奉じる国家が、インドネシアに存在していたことを示している(深見 1995:5)また、ジャワ島のポロブドゥールに仏教遺跡が残っている事実も、インドネシアとインドの文化的関係が深いことを物語っている。仏教やヒンドゥー教はインド起源の宗教である。

13世紀になるとインドから来たムスリム商人によってイスラム教が伝えられる(内堀 1995:123)。イスラム教は遅くとも8世紀にはインドネシアにもたらされていたが、インドネシアの人々に本格的に浸透し始めたのは13世紀になってからのことであった(深見 1995:15)。

1511年に東南アジア最大の交易国であったマラッカ王国がポルトガルに占領されたのを皮切りにして、インドネシアは西欧列強の国々に侵略され始める(深見 1995:17-18)。スペイン、イギリス、オランダ等の西欧諸国が覇権を争い、競争に勝利したオランダが約400年にわたってインドネシアを支配することになる。しかし、第2次世界大戦が勃発すると1941年に日本がオランダを降伏させ、代わってインドネシアの支配者となった。戦争末期の日本の降伏後、インドネシアは1949年に正式に独立を果たしている。

現在のインドネシアでは、有史以来のインドの影響や、植民地時代のヨーロッパからの影響のため、地域によってヒンドゥー教、仏教、イスラム教、キリスト(プロテスタントとカトリック)教の4つの宗教が信仰されている。中でもイスラム教徒の数は多く、インドネシア国民の約87.2%はイスラム教徒(ムスリム)といわれている。他

方、ヒンドゥー教徒は総人口の約1.8%、仏教徒は約1.0%、キリスト教徒は約9.6%である(小池 1998:64)。

## 第二節 バリ

バリはインドネシア27州の中の1州である[図1]。バリ島はインドネシアの政治・経済の中心地であるジャワ島の東に浮かぶ南北86キロメートル、東西140キロメートル、総面積約5621平方キロメートル(東京都の約2.5倍)の島である(吉田 1993:9-10)。総人口は266万人(嘉原 1995:15)であり、言語は主として、バリ語と公用語のインドネシア語の2つが使用されている。

バリ島民の93.18%はバリ・ヒンドゥー教徒といわれている(嘉原 1995:15)。バリ人の信仰するヒンドゥー教は、イスラム化する以前のジャワの宗教形態と融合しており、かつ、バリの土着の信仰とも結びついている。そのため、インドをはじめとする南アジア地域のヒンドゥー教とは異なっている。インドのヒンドゥー教と比べ、バリのヒンドゥー教は儀礼的、演劇的要素が強いといわれている。例えば、人類学者の吉田禎吾によると、インドの火葬が簡単に済ませられるのに対して、バリの火葬はお祭りのように盛大に行われるという。また、「神々や祖霊への豪華な念入りな供物」「ヒンドゥーの影響のない東インドネシアに類似する<山側><海側>の対比」「人間が子孫に生まれかわるという『再生観念』」等の要素はインドのヒンドゥー教には見られないものだという(吉田 1993:100-101)。以上のことにより本論文ではバリ島のヒンドゥー教をインドのヒンドゥー教と区別して特にバリ・ヒンドゥーと呼ぶことにする。

バリ人は朝と夕方の2回、水浴びをして身を清

めた後、家中の部屋や井戸、台所や道端にお供え物（バントン bunten）と線香を置いて祈る。バリの女性たちは同じ種類のお供え物を毎日52個づつ作らなければならず、朝起きてお昼すぎまでお供え物の制作に励むのが彼女たちの日課となっている。バリ人にとって、儀礼は非常に日常的なものである。例えば、筆者が聞いたポットンギーギーという犬歯を削る成人儀礼は、バリ人ならば絶対に通過しなければならない儀礼であり、たとえ当事者がそれを受ける前に病気で事故で亡くなったとしても、死体にポットンギーギーを施すという。

### 第三節 レンボガン島

レンボガン島は、バリ島の南東に浮かぶ総面積約15平方キロメートルの島である[図2]。半日もあれば歩いて島内を一周できてしまうような島である。1999年の統計によると、島には約7101人の住民が暮らしている(DARTER ISIAN DATA DASAR PROFIL DESA / KELURAHAN)。バリ島のサヌール村から1日2便定期的に船が出ており、毎日数十名の観光客が訪れる。近年、バリ島から渡航してくる観光客の数が増え、観光客むけの宿泊施設が次々に建設されている。しかし、観光施設が建ち並ぶのはバリ島沿いの海岸部に限られている。

島にはレンボガン(Lembongan)村とジユングバットゥ(jungutbatu)村の2つの村があり、病院が2カ所、警察署が1カ所、小学校が2カ所、中学校が1カ所、高校が1カ所ある。

観光以外の島の住民の主な現金収入源はテングサの養殖である。そのため、遠浅の海一面には広大なテングサ畑が広がっている。

隣のプニダ島にはイスラム教徒が住んでおり、そこにはモスクも建てられている。しかし、レン

ボガン島民は全てバリ・ヒンドゥー教徒である。島にはバリ・ヒンドゥー教徒のための寺院が計8カ所存在している。

## 第二章 呪術師の家

### 第一節 インドネシアの呪術師

インドネシアには呪術や薬草などを用いて病気を治療を行う呪術師がいる。彼らのことをインドネシア語でドゥクン(dukun)という。ドゥクンは、バリ語ではバリアン(balian)と呼ばれる。

インドネシアにおいて呪術はイルム(ilmu)という言葉で表現される。しかし、イルムを呪術と訳すことは本来適切ではない。何故なら、日本における呪術という言葉はある種のいかがわしさを連想させるからである。インドネシア人にとってイルムの辞書的な意味は「科学」であり、それは何らかの秩序だった知識の体系を指す。例えば、社会学はイルム・ソシアル(ilmu sosial)となり、心理学はイルム・ジワ(ilmu jiwa)となる。イルムは体系化された知識であり、現象を操作しかつそれに働きかけるための技術と捉えるのが適当である。本論文ではこうした意味をふまえて、イルムを呪術と翻訳することにする。

ドゥクンはイルムの知識に長けた者と考えられている。イルムの知識を用いれば病気を治療することや、呪いをかけて人を病気に陥れることが可能である。そのためインドネシア人はドゥクンに畏敬の念を抱いている。吉田禎吾によると、ドゥクンの呪術は「右の呪術」と「左の呪術」の2種に区別されるという(吉田 1993:145)。前者が人の病気を治すための呪術であるのに対し、後者は人を呪うための呪術、つまり邪術である。前者はバリ語でプヌンゲン(panengen)、インドネシア語ではイルム・プティ(ilmu putih)と呼ばれ、後者はバリ語でプンギワ(pangiwa)、インドネシ

ア語ではイルム・ヒタム(ilmu hitam)またはイルム・ジャハツ(ilmu jahat)と呼ばれている。

## 第二節 呪術師ワヤン・タンカスのライフヒストリー

レンボガン島のジュングバットゥ村に住むワヤン・タンカスは、観光客のガイドをするかたわらドゥクンとしてサクティ(sakti)という超自然的な力と自家製のオイルを用い、病気治しに従事している。

1930年代のバリを訪れたアメリカ人画家であるミゲル・コバルピナスによると、サクティは、人の体に電池のように蓄積できる呪的エネルギーであり、人によってその質や量が異なるという。また、サクティは、呪術と瞑想の技法を体系的に学ぶことではじめて制御可能なものとなり、その能力に優れた者だけが呪医や祭司になれるという(ミゲル・コバルピナス 1992: 337)。

ワヤン・タンカスは1955年にジュングバットゥ村に生まれた。年齢45才。筋肉質で恰幅が良く、プロレスラーのような体格をした男である。学校教育は受けておらず、島を訪れる観光客のガイドをしながら英語を覚えたという。

タンカスの父親はドゥクンではない。タンカスは10代の頃ドゥクンに病気を治してもらったことがあるという。それ以来、タンカスはドゥクンに憧れていたようだ。

1972年、タンカスは22才の時に親戚をたよってジャワ島のスラバヤのバティヌガラ(Batinegara)に移り住んだ。そこでインドネシアの格闘技であるシラットを護身術として習い始めている。そして1984年から1994年までの10年間、ジャワのガリプティ(galihputih)という場所でアバサールという名のドゥクンのもと、呪術の修行に励んだ。タンカスが一人前のドゥク

ンになれたのは1990年、35才の時であった。

また、タンカスは、ジャワのスポノ(sevono)にいるバグランというドゥクンからも教えを受けている。さらに、1999年の1月29日までバリのバンリ(bangli)という場所で約6ヶ月間、アナック・アグン・マデ・ブトラというドゥクンからも呪術の手ほどきを受けている。したがって、タンカスには3人の師匠がいることになる。

タンカスは格闘技の先生でもある。シラットを島の子供たちに教えていた時期もあった。そして彼の立場は、島の顔役とも呼べるようなものである。闘鶏などの賭事が行われる際は、その場の中心的な人物となり、皆を取り仕切っている。筋肉質で大柄な体格のため外見は恐ろしいが、よく話しよく笑う人物である。

## 第三節 呪術を学ぶ集団

ワヤン・タンカスは2000年の1月にプヌグラハン・スチ・シワ・ブダツ(penugrahan suci siwa budha)という組織を設立している。組織の活動内容は、超自然的な力サクティを用いた病気治療とその技法の伝授である。会員の数は30名を越え、その大部分が12才から35才までの男性である。会員は会費として月額2000ルピア(約22円)を支払わねばならない(註1)。

タンカスの家にはバレトゥンガ(bale tengah)と呼ばれる屋根付き祭祀場がある。バレトゥンガは、三方に壁がなく、唯一存在している壁に祭壇(pelangkiran)が備え付けられている特殊な構造の建物である。タンカスの家のバレトゥンガは病治しを行い、かつその技法を学ぶ場所である。会員もしくは病人は毎晩午後7時30分頃にタンカスの家集まってくる。

バレトゥンガの壁には組織の活動日程表が貼られている。それによると(1)満月の日とカジュ

ンクリオンの日に呪術の力を分配する (Purna ma-kayenkliion : Penyaluran ilmu tenagadalam (Penugrahan))、(2) 月曜と火曜は病治しの日 (Senin+kanis. Pertolongan. (orang-sakit). Pengobatan)、(3) 瞑想は自由参加 (Khusus. Anggota : Beba s hadir (Sembahyang))、(4) 金曜日に特別な儀礼を行う (Kecuali Ha ri Jumat)、と記載されている。以下にこれら4つの項目それぞれに関して、遂行される儀礼の手順とその内容を詳しく述べていく。

(1) 満月の日とカジュンクリオンの日に呪術の力を分配する

<満月の日>

満月の日には、プ克蘭サクティ (pukulan sakti) というサクティが月から得られるという。サクティを月から得たドゥクンは、それを会員たちに分け与える。これが満月の日に行われる儀礼である。会員たちはこの儀礼のためにプジャティ (pejati) (註2) と呼ばれるお供え物を持ってこなければならない。プジャティを作るには5万ルピア (約600円) の費用がかかる。

夜7時30分頃にタンカスの家に着いた会員たちは持参してきたプジャティを祭壇に置いた後、地面で座禅を組み始める。男性は上着を脱ぎ上半身裸になる。女性は上着を着たままでも構わない。しかし、儀礼に参加する者は必ずサルーン (インドネシアの伝統的な腰巻き) を着用し、その上に帯を巻かなければならない。

タンカスは祭壇から水の入った容器を取り出し、座禅をしている人々1人ひとりに、花びらですくった水を2回ずつ振りかける。次に会員たちは、赤、青、黄、白の花びらと椰子の葉を両手の中指で挟み込んで瞑想をする。その間、タンカスも祭

壇に向かって呪文を唱えつつ瞑想をする。

やがて、タンカスは会員たちから少し離れたところに移動し、パフォーマンスを始める。それは、以下のような一連のパフォーマンスである。33本の線香を左手に持ったタンカスは、呪文 (マントラ) を唱えつつ、右手を左右に動かし、両足を広げ踏ん張るような姿勢をとった後、会員たちに向かって声を発しながら勢いよく右手を突き出す。これはあたかも何かを飛ばしているような動作である。このパフォーマンスを2回繰り返すと、サクティの授受は終了する。

サクティを放出する際は、息を止めて全身の筋肉を緊張させているようである。無酸素運動を何度も繰り返すので、りきむたびに「ウッ! ウッ!」と呻き声が出る。この状態が1回につき約5~10分続き、これを一晩に何回も行うため、治療が終わった後のタンカスは汗だくである。あまりの疲労のため、しばしば天井の柱を右手で掴んだまま、肩で息をしていることがある。

<カジュンクリオン>

バリでは「太陽暦」「サカ暦」「ウク暦」の3種類の暦が使用されている。太陽暦は官公庁や学校で使用されているいわゆる西暦である。サカ暦は別名「太陰暦」と呼ばれ、1年は12ヶ月からなり、1ヶ月は新月から次の新月までの29日間ないし30日間である。ウク暦は「ジャワ=バリ暦」もしくは「順列的暦」といわれ、バリ人の儀礼と深く関係している。7日間をウクというひとまとまりとして扱い、1年を30のウクで構成するので、ウク暦においては210日間が1年になる。しかし、ウクはワラとよばれる1日から10日単位まで全部で10種類存在する「週」のうちのひとつである。3日の週 (ワラ) は triwara、5日の週 (ワラ) は pancawara、7日のワラは saptawara

と呼ばれ、1日から10日間のワラにはそれぞれ呼び名がある。また、ワラを構成している1日にもそれぞれに名前が付いている（吉田 1993：136 - 137）

3日のワラの最終日カジュンと5日のワラの最終日クリオンが重なる日は、カジュンクリオンと呼ばれる。カジュンクリオンは、ウク暦上での特別な日であり、悪霊が災いをもたらしやすく、かつ呪術を行うのに最適の日とされている（吉田 1993：138）。15日に1度おとずれるこの日にも満月の日と同じように、タンカスから会員たちへサクティの分配が行われる。

## （2）月曜と火曜は病治しの日

注意書きには月曜と火曜だけが病治しの日と記載されている。しかし、実際は他の曜日にも病人はタンカスの家を訪れてくる。病人の多くは病院へ行っても症状が回復しなかった人達である。治療代は1回15万ルピア（約2000円）である（註3）

病気治療に入る前に、患者は神に祈りを捧げねばならない。患者の前に4種類（赤2枚、白、黄、青）の花びらが入ったお皿が用意され、全ての人に線香が行き渡るといよいよお祈りの始まりである。

まず初めに、タンカスは祭壇に向かってひとしきり祈った後、祭壇の中から容器を取り出し、座禅をしている患者に赤い花びらですくった水を2回振りかける。その後、患者は赤、黄、白の3つの花びらを一緒に重ねて両手の中指で挟み込み、目を閉じて祈りを捧げる。

次に、患者は今持っていた3つの花びらを捨て、青い花びらを指で挟み込み、しばらく祈りを捧げる。それが終わると今度は赤い花びらで同じことをする。祈りが終わると、赤い花びらは2つに裂

かれ、両耳に挟みこまれる。

続いて、白い花びらと線香を一緒に重ねて両手の中指で挟み込んで、祈りが捧げられる。それが終わると、白い花びらは頭に載せられ、線香は地面に捨てられる。

最後に、タンカスが再度花びらで水をすくってかけてくる。患者はその水を3回飲み干し、3回顔にかけ、さらに1回頭にかけねばならない。以上の手続きはスンバヒヤン(sembahyang)といわれる。これが終わると、ようやく病気治療が始まる。

タンカスは病人とひとしきり話した後、サクティを使用した病気治療を施す。患者の病状により使用するサクティは異なる。6月13日付けの筆者のフィールドノートには病気治療の様子が以下のように記述されている。

「6月13日に来た中年女性は胃痛を訴えていた。タンカスは患者の前に座ると、目を閉じ顔を傾け何かを探すような仕草をした。しばらくすると、患部に向かって右手をかざし一言二言患者に話しかけた。次に、人差し指と中指をピースマークのように突き立て、掌を上にもむけて、患者の患部から頭部に沿って上下させた。タンカスの顔は次第に赤くなり苦しそうに歪んでいく。サクティの放出は息を止めて行われるのだ。」

この時タンカスが使用していたサクティはパーユサクティと呼ばれるものである。サクティにもいろいろな種類があり、患者の病状によりそれらは使い分けられている。タンカスの治療が一通り終了すると、治療は弟子たちに任される。

タンカスは使用するべきサクティの名前を弟子に告げると、祭祀場の後方に引っ込む。弟子たちは通常3～4人のグループを組み、タンカスに代わって病気治療に携わる。6月13日の胃痛の中年女性に対して使用されたサクティはウィシヌのサクティであった。弟子たちは患者を取り囲むよ

うにして座り、指定されたサクティを使用する。筋肉隆々とした男3人が顔を歪ませ、息を止め、患者の患部めがけて手かざしをする姿は圧巻である。

弟子たちの治療が終わると、タンカスが再び患者と話をし、仕上げとして患者の患部に自家製のオイルが塗られる。これで治療は終了である。

### (3) 瞑想は自由参加

瞑想とは病気治療を始める前に行った一連の作業のことである。赤、黄、白、青の4種類の花びらを使用したお祈りである。タンカスやレンボガン島民の話によると、毎日瞑想をすればサクティを使う能力が高まるという。

### (4) 金曜日に特別な儀礼を行う

組織に入会した者は順番に3種類のサクティをタンカスから与えられる。その営みが金曜日に行われるということである。初めてタンカスの家に来た初心者にはブラフマンのサクティが与えられる。次にウシヌのサクティ。最後にシヴァのサクティが与えられる。

以上に概観してきたように、呪術師ワヤン・タンカスはpenugrahan suci siwa budhaという組織を設立し、バレットウンガと呼ばれる屋根付き祭祀場において超自然的な力、サクティを用いた病気治療とその技法の伝授に従事しているのである。

## 第四節 ジャワの土着宗教クバティナン

イスラム教は8世紀には既にジャワに伝えられていた。しかし、インドネシア中にイスラム教が浸透していったのは13世紀になってからである。2度目にジャワにもたらされたイスラム教は、初期にもたらされたイスラム教には見られないイス

ラム神秘主義の要素を含んだスーフィー派のものであった(綾部 1995:15)。

古来より、ジャワにはジャワ神秘主義とも呼ばれる呪術的・神秘主義的な世界観が存在していた。一方、スーフィー派はイスラム教の宗派の中でもイスラム神秘主義を掲げていた。ジャワ神秘主義に慣れ親しんでいたジャワ人にとってスーフィー派が違和感なく受け入れられたのはそのためである。

人類学者の内堀基光によるとジャワ神秘主義は、「宇宙の秩序と社会秩序、宇宙全体(マクロコスモス)と人間(ミクロコスモス)とのあいだの連動性、ないしは一種の鏡像関係」をその根底に置き、その上で「人間はその内部にそなわった神秘的可能性、あるいは宇宙感取能力ともいうべきものをを用いて宇宙の真理に接近することができる」とする思想である。人間の内部にそなわった、宇宙の真理に接近するための能力はラサ(感性)と呼ばれ、ジャワ神秘主義においては、この能力を最大限まで高めていくことが目標とされる(内堀 1995:133)。

ジャワ神秘主義に基づいた実践はクバティナンと呼ばれる。クバティナンとはアラビア語からの借用語パティン(内面)に由来する言葉であり、「内面に関する教え」という意味である(小池 1996:82)。

クバティナンの修行は禅の修行によく似ている。修行は、断食、性的禁欲、瞑想、徹夜の行、夜間の沐浴、山中や洞窟への隠遁といった超自然的な危険に満ちた厳しいものであり、経験の浅い者であればその危険に圧倒されて発狂してしまうという(内堀 1995:137)。こうした危険を避けるためにも初心者はグル(インドネシア語で師)の指導を受けなければならない。

ここでいう師にあたるのがドゥクンである。か



くして、1人のドゥクンを中心とした集団が形成される。

内堀は「グルを中心として行われるクバティナンの集会は5人から50人程度の比較的小規模な会合である。ジャワ人のあいだで、こうした集会は人間の内面性を高め、心の平静を獲得するための一種の成人学校の役目を果たしている。ある調査によると、成人ジャワ人の3%から10%に達する人々が何らかのかたちでクバティナンの集会に参加しているという。集会は多くの場合、グルの自宅で開かれる。年齢の区別、男女の違いを問わず、彼の信奉者が一堂に会するものであり、そこにおいてはイスラム教、キリスト教、仏教といった形式的な宗教帰属すら問題にされないことが多い。集会は参加者による共同の行の実修と、それにつづくグルと信奉者の対話から成り立っている。ここに見られるのは、宗教的活動と結びついた社会的緊密性の存在であり、人間と宇宙秩序との合一をめざす場における人と人との一体感である。」(内堀 1995:137-138)と述べている。

タンカスの組織は多くの仲間たちと共にイルムを学び、時には和気藹々とおしゃべりをするような集団である。その雰囲気は若者宿を思わせる。また、タンカスはジャワで修行した際に、そこでも現在と同じような環境で呪術を学んでいたと述べている。さらに、人類学者の小池は「クバティナンのなかには、理論的に体系化された世界観をもち、インテリ層が集まるようなグループもあるし、政府高官などにも信奉者をもつような宗派もある。その一方では、農村部で多くの信者を獲得するような宗派も存在する。その場合、ドゥクン(呪医)の超自然的力を使った病気治療によって、人気を得ていることが多い。」(小池 1996:83)と報告している。

したがって、レンボガン島のドゥクンであるワヤン・タンカスの組織はクバティナンの流れに属する可能性が高い。

### 第三章 サクティはいかにしてリアリティを持つに至ったのか

#### 第一節 サクティの起源

紀元前以来、インドネシアはインドから様々な文化的影響を受けてきた。バリ語やインドネシア語の中にサンスクリット語に類似した言葉を見つけることができるのはそのためである。サクティもそのような言葉のひとつである。サンスクリット語におけるシャクティがサクティにあたる(吉田 1993:123)。

ヒンドゥー教の一派である性力派において、シャクティは「能力」を意味する。「能力」とは産む力を指し、女性の生殖力を意味している(中村 1979:222-223)。性力派の人々は『『神聖な能力』(シャクティ)を女神として擬人視し、それを崇拜』(中村 1979:223)していた。この信仰は、インドに先住していた非アーリア人の女神崇拜と、紀元前1500年頃に侵入してきたアーリア人の宗教が融合して生まれたものであった(中村 1979:223)。

バリ・ヒンドゥーにおけるサクティの起源はインドのヒンドゥー教におけるシャクティである。シャクティはサクティとしてインドネシア語に取り入れられ超自然的な力を意味するようになった。シャクティはインドのヒンドゥー教の文脈では森羅万象を作り出す創造力を示すものであり、また同時に性力をも意味する。何らかの目に見えない力を意味するという点ではサクティもシャクティもその両者の意味は共通している。

筆者は語源よりも、レンボガン島の人々がサクティを現実に存在するモノとして捉えている事実

に注目したい。そして、サクティのある現実（リアリティ）に生きることがいかにして可能となるのかという問を設定し、それに答えたいと思う。以下の節から、サクティを巡る実践と言説を紹介し、それをもとに分析を試みる。

## 第二節 病気治療の場におけるサクティ

パレトウガでは、訪れた病人に対して大仰なパフォーマンスが日夜行われている。タンカスによれば、人が病気になるのはイルム・ヒタムにかけられるからだという。イルム・ヒタムにかけられた者の身体に、レヤツ（マンキとも呼称される）と呼ばれるお化けのようなモノが入り込むために、病気が発生するという。そのため、超自然的な力サクティを用いることで、病気を引き起こしている原因であるレヤツを追い出すことが、病気を治すための方法とされる。

サクティは目をつぶり呪文（マントラ）を唱えつつ右手を天に差し上げ、何かを掴むような仕草をすることにより得ることができる。人によっては、頭上にかかげた拳を自分の顔前まで持ってきて開き、顔の表面をなでるようにして上から下へ動かす動作を3回繰り返すこともある。これらの手続きの後、治療者は息を止めつつ、体中の筋肉を緊張させ歯をくいしばりながら、対象に向かって右手（または両手）をかざすのである。サクティを放出する作業はかなりの疲労を伴う。

病気治療で使用されるサクティにはいろいろな種類がある。筆者が調査中に知ることができたサクティは、ブラフマン、ウイシヌ、シヴァ、ククワタンウパス、バユグニサクティ、パーユーサクティ、の計6種であった。また、サクティの種類により、手のかざし方も変化する。以下にこれらのサクティの用いられ方とその状況を詳しく記述していく。

### <ブラフマン>

ブラフマンのサクティは炎の力だと説明される。パレトウガの病気治療の場で使用されるのは稀である。このサクティは組織に初めて入会した初心者に与えられるものでもある。みぞおちの前あたりで、右手と左手を掌に面して横に重ね合わせるのがブラフマンのサクティを使うときのポーズである。手は右手を上にして重ね合わされる。その際、両方の掌の間には一定の間隔を設けて置かねばならない。

### <ウイシヌ>

ウイシヌのサクティは呪術初心者に与えられる3つのサクティのうち、ブラフマンに次ぐ2番目のサクティである。ブラフマンのサクティが炎であるのに対して、ウイシヌのサクティは水と説明される。そのため、ウイシヌのサクティは発熱を伴う疾患に対して頻繁に使用される。6月13日の患者は胃痛を訴えていたので、タンカスの指示によりウイシヌのサクティが使用された。熱を水の力で中和させるという論理である。みぞおちあたりに左手を持ってきて、掌を上に向けて横にし、その上に右手をやや斜めに立たせるというポーズでウイシヌのサクティは放出される。

### <シヴァ>

シヴァのサクティはドゥクンから与えられる3つのサクティのうちの最後のものである。このサクティは風の力である。しかし、今回の調査中に病気治療の場で使われるのを確認することはできなかった。

### <ククワタンウパス>

サクティの中でもかなり大きなエネルギーであ

る。あまりの強さのため、病気治療に使われることはなかった。7月11日にタンカスの助手的存在である22歳のカデツが、左目と頬に痛みを訴える女性患者に対してククワタンウパスを使おうと試みた。通常、サクティは右手を天にかざし、瞑想することで得られる。しかし、カデツは右手で何かを掴み取るような仕草をした途端、左手で右腕をかばうようにして押さえ、顔を歪ませ悲痛な叫びをあげた。すぐさまタンカスが駆け寄り、カデツの右腕を肩から手の方まで何かをしばらくさすようにしてさす。その後、タンカスは祭壇から瓶に入った自家製オイルを取り出し、カデツの右腕全体に塗った。カデツに続いて、別の青年がククワタンウパスをおろそうと試みた。しかし、カデツと同様に失敗に終わり、再びタンカスに介抱されていた。

#### <パーユースクティ>

パーユースクティは病気治療で頻繁に使われるサクティである。パーユースクティを使うポーズは、一連の瞑想の後、右手の人差し指と中指をピースマークのようにして突き立て、掌を上に向け、その体勢を維持したまま患者の患部から頭部まで、下から上に右手をゆっくりと動かしていくというものである。この動作も患者の体内にいる何かを体の外に絞り出していくような動作である。このサクティはククワタンサクティとも呼ばれ、病気治療の最初の方で使われる。

#### <バユグニサクティ>

パーユースクティとセットで使われることの多いサクティである。瞑想の後、右手を勢い良く患者の患部にかざすことで使用される。典型的な手かざしのポーズと言える。

以上が、筆者が調査中に知ることのできたサク

ティとその使い方のポーズである。病気治療の概要をもう一度簡単に整理しておきたい。

通常、バレットウガを訪れた病人には最初にタンカスが対応する。タンカスは患者の訴えを聞いた上で患者の患部に手をかざすか、または患者に向かう合うようにして座り、目をつぶって何かを探しているような仕草をする。しばらくして、タンカスは患者に病気の原因を明らかにする。サクティを使った治療が始まるのはその後である。

タンカスはどの患者に対しても、まず初めにパーユースクティを使う。そして場合に応じてバユグニサクティを使う。タンカスの治療がひととおり終了すると治療は弟子たちに任せられる。治療を弟子に任すのは、呪術の練習のためである。

弟子たちはタンカスの指示するサクティを使って病気治療にあたる。弟子は1人で治療にあたる時もある。呪術初心者は先輩たちに混じって治療にあたる。

弟子たちの治療が終わると、再びタンカスが患者と話をする。患者の具合が良くなっていけば、ここで治療は終了である。しかし、そうでない場合、タンカスが再び治療にあたる。この時の治療は、タンカスによるサクティの照射と患者の患部に直接触れて行うマッサージである。そして最後に、タンカスは祭壇から自家製オイルを取り出し、患者の患部に塗りつける。これで治療は終了である。タンカスによれば、サクティを使いこなすには練習が必要だという。患者の病状が良くなるのは、弟子たちの能力が未熟だからだという。

治療の際に放出されるサクティには全て名前が付付けられており、使用する時のポーズも全て異なっている。そして、患者の病状に応じてサクティは使い分けられている。病気治療の場で使用されるサクティには秩序だった体系を見ることができ

る。

### 第三節 サクティを巡る実践と言説

サクティを使った病気治療はタンカスのパレトウンガにおいてだけ行われているのではない。日常生活においても、レンボガン島の人々は肩こりや原因不明の発熱、腕の痛みを感じたときに、サクティを使用している。また、この営みを行う人間は、タンカスの家で呪術を学ぶ青年の親族やその関係者に限られているわけでもない。

バリ本島のサヌール村で出会ったグティという名の青年は、タンカスの家のパレトウンガとは全く無関係であるにも関わらず、サクティによる病気治療やその使い方を知っていた。このことは、レンボガン島だけにとどまらず、バリやインドネシアの至るところで、サクティを用いた実践が行われていることを示唆する。グティによると、彼も16歳のころ、50万ルピア（約6000円）を支払い、サヌール村に住むドクンの家でブラフマンやウィシヌ、そしてシヴァのサクティを得たという。

グティはサクティをもらう理由を「強くなるため、体の形を良くするため。」と説明した。さらに、「サクティを得るには神を信じていなければならない。全ての人間がサクティを得られるわけではなく、神を信じる者だけがサクティを得ることができる。」と語った。

「サクティを使ったことがあるか？」という質問に対しグティは「ある」と答えた。ある日、グティの客が他の男たちに横取りされそうになった。グティは観光客を捕まえてバリ島を案内することで生活の糧を得ている。客を巡るトラブルがもとでグティと男たちは言い争いになり殴り合いの喧嘩になった。そこでグティはサクティを使ったという。「どうやって？」と筆者が聞くと、グティは

目を見開き両手を突きだした。グティの動作は右手首と左手首を付け、両方の掌を大きく開き、胸から前方へ動かすというものであった。サクティをぶつけられた相手の男は倒れたという。「本当か？」と何度も尋ねる筆者にグティは「本当だ」と何度も答えた。

レンボガン島のタンカスの他にも、サクティを使った呪術の技法を教えるドクンがサヌール村にいます。そして、呪術を学んだ者は、サクティを喧嘩の時に使うことができるらしい。サクティの用途は病気治療だけではないのだ。サクティはバリ人にとって現実的な作用を及ぼすものといえる。

しかし、レンボガン島の19歳の青年は恋人をめぐって喧嘩をした際に、相手の男がサクティを使ってきたにもかかわらず相手をこてんぱんにたたきのめしたと言う。この青年は「サクティは信じないわけではないが、自分は興味がない」と話す。「どのようにして相手の男はサクティを使ってきたのだ？」という筆者の質問に対して、青年は顔をしかめ右手を広げてバユグニサクティのポーズをとった。

「イルムを学んでいる」と筆者が話すと、たいのバリ人は感心する。「それなら強盗にあっても大丈夫だ」「お金があったら自分も学びたい」バリ人はそう答える。そして、「日本にもイルムはあるか？」と尋ねてくる。バリ人にとって呪術は日常的な出来事なのだ。イルムをドクンの家で学ぶということは、我々が日本において水泳やピアノの教室に通うことと同じような感覚で語られる。それはバリ人にとって一種のファッションのようにも思える。

イルムやサクティに関する話題は尽きることがない。これらの話の内容は我々日本人にとって耳を疑うものである。しかし、パレトウンガに通う

人々は実際にサクティに関する実践を行っており、上述の話を嘘やでたらめと切り捨てることはできない。

筆者はイルムを学ぶ仲間たちに、タンカスの組織に入ったきっかけを聞いた。会員たちのほとんど全てに共通しているのが、呪術やサクティに対する抵抗感の少なさである。以下に数例紹介する。

<カトゥール・バユー 26歳 男性>

筆者：「どのようにして組織のことを知ったのですか？」

バユー：「タンカスがサクティで病人を治しているのを見せてもらった。その時（1998年）から自分も（呪術を）勉強している」

<ワヤン・スウィダラ 23歳 男性>

筆者：「どのようにして組織のことを知ったのですか？」

スウィダラ：「カデッ・ジャランコン（助手）に誘われてタンカスの家に来た。それが9ヶ月前。1999年11月のこと。最初はパワー（サクティ）を信じていなかったが、今は信じている。」

<カデッ・ジャランコン 22歳 男性>

筆者：「どのようにして組織のことを知ったのですか？」

ジャランコン：「友だちからタンカスのことを聞いた。タンカスに会い、パワー（サクティ）を見せてもらった。（それ以来）4年間ここ（バレトウガ）で勉強している。」

<ワヤン・シェンティ 27歳 男性>

筆者：「どのようにして組織のことを知ったのですか？」

シェンティ：「1年前に目の周りが痛くなった。病

院へ行っても治らない。困っている時にタンカスに会った。タンカスが『家に来い、治してやる』というので、タンカスの家に行った。そこでタンカスに治してもらった。だから組織に入った。健康と安全のためにイルムを習っている。」

ワヤン・スウィダラ以外の者は、サクティに対してははじめから何の疑いも抱いていなかったようである。しかし、スウィダラもタンカスのパフォーマンスで病人が治癒してしまうのを目の当たりにすると、当初の疑いをあっさり捨てている。

このように、サクティの話題はさも当たり前のように語られる。次に、彼らが嘘やまやかしではなく、本当にサクティの存在する現実を生きていることを示すエピソードを6つあげる。サクティの実用的な威力は絶大であり、筆者の目にサクティという力に対するバリ人の姿勢は真剣そのものに映る。

<事例1>チェック

チェックとはサクティの有無を調べる行為である。呪術初心者や初めてバレトウガを訪れた患者に対して行われる。バレトウガにおいては英語が多用されており、チェック(check)やリフレクト(reflect)等の言葉が頻繁に話されている。チェックは、インドネシア語ではプ克蘭(pukulan)、バリ語ではジャグラン(jaguran)という。

バレトウガの人々は、その場にあった小物にサクティを込め、それを別の人間にチェックさせることがよくある。まず初めに、ある人が一連の動作をしてサクティをマッチ箱に込める。そしてそれを隣に座っている人に渡す。渡された人は自分のサクティをマッチ箱にぶつけるのである。左手にマッチ箱のをせ、右手をそれにかざし、サクティの有無を調べるのである。

サクティが入っているなら、右手は弾かれるよ

うにしてマッチ箱と反発する。それはまるで極の異なる磁石が互いに反発するような動きである。そして、稀にマッチ箱にサクティが入っていない時があるのだ。

7月5日の瞑想の後、おしゃべりをしていたその途中で、タンカスが近くに落ちていた赤い花びらにサクティを込め始めた。隣に座っていたカデッがそれをチェックする。しかし、カデッの右手は反発する気配がなかった。その様子を見ていたバクーという若者は「入ってない」と叫ぶ。

筆者はタンカスに、サクティが入らなかった理由を聞いてみたが、タンカスは「分からない」と頭をふった。

そのタンカスに「やってみろ」と言われて、今度は筆者がサクティを込めた。半信半疑ながらも皆がやるのと同じようにして花びらにサクティを込めた。しかし、カデッは今度は反応した。花びらにかざした右手は「何か」と拮抗して小刻みに震えている。カデッは驚いた顔をして「熱い!」と叫ぶ。

タンカスが筆者に「何のサクティを込めた?」と聞いてきた。筆者はこれといって何も意識していなかったの、咄嗟に「ブラフマン」と答えた。周囲は納得がいったように「おお。ブラフマン!」と関心している。しかし、カデッが「本当にブラフマンか?」と聞いてきたので、筆者は正直にサクティを込める時に唱えた呪文(マントラ)を口にした。この呪文は7月2日にタンカスから「かなり強力だ」と言って教えてもらったものである。しかし、筆者はこの呪文が何のサクティと関係しているのかよく知らなかった。

筆者の答えに周囲が沸き立った。皆驚き興奮している。というよりも「それはやりすぎだ」となかばあきれているような雰囲気である。バクーは「熱すぎるのは良くない」と言って筆者をたしな

めた。しかし、カデッは「すごいすごい!」と言って喜んでいる。一方、タンカスは「熱すぎるのは痛い」と言う。

その後、周囲は筆者が使ったサクティについてしばらく議論を戦わせていた。しきりに感心している者もいれば、当惑して怯えている者もいた。「(筆者は)毎晩、瞑想をしにここへ来るから(サクティが)強いのだ」と話しているのを聞いた。

#### <事例2>プチョッ

サクティはいろいろなモノに込めることができる。ネックレスや指輪に手をかざしてサクティを込め、それらをお守りにすることもできる。時折、タンカスは祭壇に飾っている木ぎれを削って首飾りを作り、それにサクティを込め、患者にお守りとして与えていた。

お守りとして最高の威力を持つものにプチョッ(pchot)というものがある。これは植物のツルに赤と黒の糸を巻いて作った竿のようなモノである。7月1日には、クタからきた2人の若者が50万ルピア(約6000円)でそれを購入していった。テングサ労働(註4)の1ヶ月分の収入が20万ルピア(約2400円)であることを考えると、プチョッは高価である。若者によると、プチョッを腰に巻き付けていれば、ブラックマジックをかけられることもなく、喧嘩の際にナイフで刺されても平気だという。

#### <事例3>リフレクト

筆者が初めてタンカスのバレットウガを訪れ、ブラフマンのサクティを与えられた時、同じく今日から初めて呪術を学び始める青年がいた。彼は筆者と同じように、タンカスからブラフマンのサクティを得た。筆者は彼よりも先にサクティをもらったので、後方に下がっていた。

その青年に対する儀礼が終わってまもなく、タンカスは彼にその場にいた若者の1人に向かってチェックをするよう指示した。チェックは、何かに向かってサクティを出すことでもある。

初心者の青年はその若者に向かい合うようにして立ち、瞑想をし右手を差し上げ、しばらくして勢い良くサクティを放出した。その途端、彼は酒にでも酔ったようにフラフラとよろめいた。助手のカデッが急いで駆け寄り、「フン！」と一声唸って彼の右腕を掴んだ。青年は気を失い、カデッに抱かれてぐったりとしていた。

この出来事に驚いていたのは筆者だけのようであった。周囲は淡々とことの成り行きを見守っている。筆者は、さほど驚いた様子でもないタンカスに一部始終を聞いた。初心者の青年が発したサクティが跳ね返された、という。初心者の青年がサクティをぶつけた相手は、彼よりも強いサクティの持ち主だった。そのため、飛ばしたサクティが跳ね返されたという。タンカスは今起きた現象を「リフレクト」と英語で説明した。

#### <事例4> プクラン・アジ・ハリ・リントール・サクティ

7月13日に、プクラン・アジ・ハリ・リントール・サクティ (pukuran aji hali lintar sakti) という技をタンカスが皆に教えた。護身用の技だという。呪術を学ぶ青年たちは皆が座って見ている前で、糸で天井に吊された棒に向かってサクティを投げつけるのだ。1人ずつ順番に行い、そのたびにカデッがサクティの有無をチェックした。

はじめにタンカスの息子が試みた。やり方は人それぞれ異なる。手を差し上げ瞑想をし、対象に向かって右手をかざすのは同じであるが、姿勢やタイミングが微妙に異なっている。しかし、タンカスの息子は瞑想を省略していきなり右手をかざ

してしまった。そのため、周囲から笑いが起こる。ところが、カデッが棒をチェックすると、確かにサクティは入っていた。

次に、バユーという名の青年が試みた。しかし、棒にはサクティが入っておらず、チェックをしたカデッはそのまま棒に向かって前進してしまった。

次に、スウィダラという名の若者が挑戦した。彼のポーズは尻を後ろに付きだし、こころもち両膝を曲げ、その上で小刻みにゆれるというものだった。そのため、周囲から「おかまおかま！」とやじが飛ぶ。しかし、サクティはしっかり入っており、チェックをしたカデッは後ろに吹っ飛んでいった。

そして最後に筆者も試みた。タンカスが教えてくれたポーズをそのまま真似して手をかざした。チェックをするとちゃんとサクティが入っていたらしく、ふたたびカデッは派手に後ろへ吹っ飛んでいった。

#### <事例5> サクティの受け渡し

時折、バレットウガの若者たちは、サクティを人から人へ渡すという行為を行う。瞑想をし右手にサクティを宿らせた男の腕を、別の男が何かをしぼりだすようにして、肩の付け根から指の先まで、両手でしごくのである。筆者がこの営みを目にした機会は2回しかなかったが、2人の男は真剣そのものであった。しかし、この技はいつも失敗に終わっていた。顔面を引きつけて全身の筋肉を総動員してサクティの受け渡しを試みたのに、あえなく失敗に終わったため、周囲から笑いがおこる。それは手品を披露しようとして失敗した者を暖かく受け入れるような、そんな笑いである。

#### <事例6> 熱

筆者がレンボガン島滞在中にお世話になってい

た民宿の主人カトゥールが筆者に治療を頼んできた。右腕が痛いという。夕方のお祈り中に急に痛みを感じたという。カトゥールが治療を頼んできたのは、筆者が彼の息子とともに毎晩タンカスの家へ呪術を習いに通っていたからであろう。しかし、その時は昼間であり、我々がいた食堂には欧米人の観光客もいた。それにもかかわらずカトゥールはサクティによる治療を頼んできたのである。幾分戸惑いながらも、筆者は瞑想をし右手を差し上げ、一連の事務的な動作をした後、カトゥールの右腕に向かって手がざしをした。

カトゥールは「熱い！」と言いつつ顔をしかめた。そして、治療が終わると「シゲ（筆者）はブラフマンの力しかない。」と不満そうに言った。咄嗟に筆者が「違う。ウィシヌの力も貰った」と反論すると、それでもカトゥールは右腕をさすりつつ「まだ痛い。治っていない。シゲの力じゃだめだ」と不平をもらした。

翌朝、カトゥールは元気になっていた。彼の息子のマディが治療をしたら治ったという。カトゥールは「マディはタンカスから既に3つの力を得ている。だから効いたのだ」と筆者に説明した。

以上に見てきたように、バレットウンガに集う人々やその周辺の人々にとってサクティの存在は疑うべくもない大前提である。全ての事例に共通して言えることは、サクティに対する彼らの態度は真剣そのものということである。彼らは演技をしていない。当たり前常識の一部であるかのように、サクティの力の強弱やその種類、そしてその存在について語る。

バレットウンガでサクティを用いて遊ぶ若者達に混じって、筆者もサクティの入ったマッチ箱や人形をチェックしてみた。しかし、筆者は何も感じるができなかった。それについては、彼らは筆者の修行が足りないと言う。

## 第四章 考察

### 第一節 呪術に関する先行研究

タンカスのバレットウンガに集う人々はサクティという超自然的な力を文字通り使うことができる。病気治療の場ではサクティを用いた治療がなされ、患者は確かに回復していった。筆者が治療をしたベロンという名の青年は体のだるさと熱を訴えていたが、バユグニサクティによる治療を受けたその翌日には元気になっていた。道を歩いていた筆者を遠くから呼び止め「おかげで治った、ありがとう」と礼を言ってきた。また、足が痛くて歩くことができなかった男も、2回に渡る治療の末、ちゃんと歩けるようになっていた。

呪術師は自然治癒力を引き出す技術に長けた者だ、という主張がある。偽物の薬を処方したにもかかわらず病気が治ることをプラセボ効果というが、呪術師もその方法を用いるのである。しかし、呪術師は偽薬を使わずにパフォーマンスだけで病者を癒すこともある。こうした行為による治癒現象は、人間の精神と免疫系が深く関わっていることに起因していると考えられる。しかし、その詳細なメカニズムはいまだ解明されていない。

多くの呪術研究者が呪術師が使うテクニックを報告している。例えば、レヴィストロースの『構造人類学』に登場する呪術師ケサリードは、あらかじめ口に綿をつめておき、口内を自分の歯で噛んで血を含ませたあと、それを患者の目の前で吐き出して「お前の病気を取り出した」と説明する。その結果、患者の病は癒えてしまうのだ。

筆者が明らかにしたいのは、サクティという力を自明のものとして生きているバレットウンガの人々が、いかにしてそのようなリアリティを感じることができるようになったのかという点である。呪術的なパフォーマンスによる病気治療は、サク



ティという不動のリアリティによって可能となっている。サクティをあたかもそこにあるように体感せしめているものは何であろうか。どのような装置がそこに働いているのだろうか。

ここで筆者の呪術に対するスタンスを明らかにするために、呪術を巡ってこれまでどのような研究がなされてきたのか、簡単に整理しておきたい。その際、人類学者のタンバイアの著書『呪術・科学・宗教』を参考にする。

#### <フレーザーの呪術論>

呪術に関する研究としてはフレーザーの研究が有名である。フレーザーは呪術的な思考の源泉を、ふたつの基本的な原理に分類した。ひとつは類似という原理であり、もうひとつは接触という原理である（タンバイア 1996：86）。

前者の原理に基づいた呪術は類感呪術または模倣呪術と呼ばれ、後者の原理に基づいた呪術は感染呪術もしくは接触呪術と呼ばれる。例えば、前者においては「人形に釘を打ち付けて憎む相手を殺す」という行為があてはまる。この行為は、似ているモノは互いに影響を及ぼす、という考えにより行われている。一方、後者においては「憎む相手から抜き取った髪の毛を燃やして相手に死をもたらす」という行為があてはまる。この行為は、相手の体に接触していた髪の毛は体から離れても互いに影響を及ぼす、という考えにより行われている。

フレーザーは、これらの行為が誤った因果関係の把握に基づいてなされていると考えた。彼は、似ているものや接触していたものは互いに影響を及ぼすという思考形式を、未開社会の人々に多く見られるとし、これらの考えに基づいて行われる行為を呪術としたのである。呪術は非合理的な誤謬の産物とみなされたのである。そしてさらにフ

レーザーは呪術を、科学になりそこねた擬似科学と捉えた。

#### <ウィトゲンシュタインの呪術論>

フレーザーの呪術論に対し、哲学者であるウィトゲンシュタインは反発を露わにする。未開人は誤った因果関係に基づいて呪術的实践を行っているのだというフレーザーの主張に対して、ウィトゲンシュタインは、未開人はそもそも因果関係など念頭に置かずに無根拠的にある行為をしているにすぎないと反論する。

人形に釘を打ち付けることにより憎む相手を本当に殺せると未開の人々は考えてはいない、というウィトゲンシュタインの意見は、フレーザーの「未開人の行為は非合理的な因果関係に基づいている」という意見と真っ向から対立する。ウィトゲンシュタインは次のように述べる。

「像を焼いてしまうこと。愛する者の写真に口づけすること。これは当然のことながら、その図柄があらわしている対象に及ぼすであろうならかの効果への信仰に根ざしたようなものではない。その目的は満足することであり、そしてまた、満足は得られるのである。あるいはまったくなにも目的とはしていない。我々はそのように行動し、そのとき満足したと感ずるのである。（中略）子供を養子にすることが母親がその子を引っ張って自分の着物の中をとおすという方法でなされるとき、ここには誤りがあると信じ込み、彼女は自分の子供を産んだと思っていると考えてしまうことがおかしいのである。」（タンバイア 1996：100 - 101）

ウィトゲンシュタインは、フレーザーが未開人の行為について考える際に無意識に設定している「類似と接触の原理が行為を導く」という構図を攻撃したのである。

<マリノフスキーの呪術論>

ウィトゲンシュタインが呪術的行為の無根拠性に着目するのに対して、マリノフスキーは機能主義的な観点から、呪術がもたらす心理的效果を強調する。マリノフスキーによれば、呪術は、未開人が自分たちの知識や技術ではどうすることもできない状況に立たされた時に初めて使用されるものだという。例えば、トロブリアント諸島では沿岸での漁業の場合には何も行われない。しかし、遠洋漁業にむかう際には呪術的な儀礼が行われる。沿岸に比べて遠洋での漁業は危険に満ちており、人間の力ではコントロールすることができない。このような状況に対処するために呪術が用いられるのである。マリノフスキーは、呪術を不安を軽減させるための技術と考えたのである。

また、マリノフスキーは呪術の効力に関して「呪術は『客観的』にはまがいものであるが、しかしそれをおこなっている者にとっては『主観的』には正しいものである」(タンバイア 1996: 136)と述べている。呪術師の呪文や仕草が、自然の運行にたいして客観的に、因果論的に、直接的に作用することはないかもしれないが、これらの言葉や行為が、それを見ている人々に影響を及ぼし、彼らの意図や動機や期待感に影響を与えることによって結果を生み出しているのは確かだ、とマリノフスキーは言う(タンバイア 1996: 136)。マリノフスキーにとって呪術は「行為者である人間の状態を変えることによって『実用主義的』な効力のあるもの」(タンバイア 1996: 136)なのである。

<レヴィストロースの呪術論>

レヴィストロースは著書『構造人類学』の中で、クワキウトル族の呪術師ケサリードの話載せて

いる。呪術に対して懐疑的な呪術師であるケサリードという若者が、不信を抱きつつもトリックを駆使して病人を次々に治療し、彼に勝負を挑んできた呪術師をもそのトリックで発狂させてしまうという話である。そして次章においてレヴィストロースは、インディアンのカナ族に伝わる難産治療に関する呪術を引き合いに出し、呪術がどうして効果を持つのかという問に答えようとしている。

レヴィストロースによると、治療の際に呪術師が歌う歌には、神話的な構造が含まれており、難産で苦しむ女性の傍らで歌うと、神話の内容に応じて身体器官の変化をもたらすという。「出産の進展は神話の継起的初段階に反映している。」(レヴィストロース 1976: 222)

歌の内容は、ネレガンと呼ばれるカナ族の呪術師が己の姿を「恐ろしい姿」に変えて「ムウの道」に突入し「ムウの住みか」まで到達したのちに再び「ムウの道」から外へ出ていくというものである。その際、ネレガンたちの行進形態は「前後密接した縦隊」から「四列」に、そして外界に戻っていく時には「横隊」に変化していく。神話の中に現れる「恐ろしい姿」は勃起したペニスであり、「ムウの道」と「ムウの住みか」はそれぞれ膣と子宮を象徴するとされる。

レヴィストロースは「おそらく、神話の細部のこうした変形の目的は、対応する器官の反応を呼び起こすことにあるのだろう。しかしそれが産道の膨張の現実的進展を伴わぬかぎり、患者は経験の形でそれを所有することができないであろう。神話と出産の平行関係の調和を保証するのは、象徴効果である。」(レヴィストロース 1976: 222)と述べている。象徴効果をもたらされたために、神話が患者の身体に変化をもたらしたということである。

しかし、人類学者の竹沢尚一郎(竹沢 198

7 : 6 1 ) は、「レヴィストロースは『象徴(的)効果』という概念を、現実に存在するものとして考えているが、明確に説明してはいない」と指摘する。竹沢によれば、レヴィストロースは論証不可能なふたつの前提にもとづいて論を進めているという。ひとつは、生理-身体レベル、無意識レベル、意識のレベルという、人間の生体の3つのレベルの間に「相同の構造」が存在するということであり、もうひとつは、象徴が、この3つのレベルをつらぬいて作用する力をもっているということである(竹沢 1987 : 55 - 56)。レヴィストロースは、「相同の構造」や「象徴の力」を無条件に設定することで、呪術がどうして効果を持つのかという問に答えつつもりになっていたようである。

以上、呪術に関する先行研究を概観してきた。フレイザーは未開人の行為は誤った因果関係の把握に基づいてなされるとし、それを呪術と捉えた。フレイザーは呪術的行為を生じさせる思考形式のモデルを提示したといえる。

一方、ウィトゲンシュタインは進化主義的で牽強附会的なフレイザーの見解に反発し、呪術を語る際にフレイザーが採用している「ある目的を達成するためになされる手段は誤った因果関係の把握によって導入される」という考え方を攻撃した。ウィトゲンシュタインは、未開人は近代人よりも劣っているために「類似しているもの」や「かつて接触していたもの」を「達成したい目的」に関連づけて呪術的行為を行うのではないと主張した。呪術的行為は何らかの目的を実現するための具体的な実践ではある。そのことはフレイザーも認めていたことである。しかし、そこに類感や接触の原理を持ち込んでしまうことにウィトゲンシュタインは異を唱えたのである。

ウィトゲンシュタインの上記の見解は、呪術や

儀礼を研究する際にこれまでの人類学が陥ってきた象徴解釈の図式からの軌道修正を促すものでもある。人類学者の浜本満は、何かが表現や伝達を目的として使用されている際に、それを象徴と呼んで分析することには何の問題もないが、人類学者はときとして逆に、理解不能なものに出会うと象徴という言葉を使う傾向があった、と述べている(浜本 2000 : 110)。目的-手段の関係や合理的な意味・機能連関によっては理解できないために象徴とされてしまったものは、今度は何かを意味しているに違いないという思惑のもと、隠された意味の解釈や解釈に晒されるのである(浜本 2000 : 110)。ある種の行為のその遂行のされ方は、何の根拠もなくただそのようになされることがあるのである。それに象徴というレッテルを貼ってしまうことは議論を混乱させるだけなのだ。むしろ、問題にすべきは、ある種の行為が類感や接触の原理を彷彿とさせるようなやり方で遂行される理由なのである。

そして、マリノフスキーはある共同体において呪術が果たす役割とその機能を説明している。マリノフスキーによると、予測不可能な事態における不安を軽減させることが呪術の役割であった。しかし、彼の意見は、彼自身が持っていたデータによって反論されることになる。遠洋漁業だから呪術が行われるのではなく、実は遠洋漁業における漁の対象が鮫であるために呪術が必要になると考えることができるのである。トロブリアント社会では鮫は価値あるものとみなされており、その他の魚とは意味づけが異なっている。このことを度外視して、呪術が不安の軽減のためだけに利用されていると主張することは、社会的に構築された価値の問題(神話)を切り捨てることになるのだ。

しかし、マリノフスキーのもう1つの主張は傾

聴に値するものである。呪術は客観的にはまがいものであるが、当事者にとっては主観的に正しいものであるという意見は、筆者の呪術に対するスタンスと重なる。

筆者のスタンスとしては、呪術が効果をもたらす理由を説明しようとしたレヴィストロースと、呪術を実用主義的な効力をもつものとして捉えたマリノフスキーのそれに近い。レヴィストロースは、神話とそれとともに利用される象徴が身体に影響を与えることを無条件に認め、そのことに象徴効果という名前を付与した。一方、マリノフスキーは、呪術は自然の運行に何ら影響を与えるものではないが、それを見ている人々には確実に影響を及ぼす、と述べている。筆者はこれらの考えを部分的に踏襲したい。

すなわち、神話が構築され、それを人々が内面化し、そのことが病気治療の際などに実用主義的な効果を発揮する土台となるという考えを採用し、呪術師タンカスはバリにおける文化的背景をうまく利用して確固たるリアリティを患者や弟子たちに感じさせていると主張するのである。

呪術が力を持つためには、当該の人々に神話や象徴体系といった文化的背景が形成されている必要がある。しかし、そのプロセスを探求することはひとまず保留しておき、呪術師がいかにそれらを利用して現実を作り出しているのかを明らかにしたいと考える。信心や信仰といった形で否応なしに人々を呪縛する物語は、どのような技術を介して、現実味を帯びるのか。

レヴィストロースの「象徴効果」は神話なくして成立しない。マリノフスキーの「呪術の実用主義的な効果」も同様である。しかし、その神話の成り立ちの探求は置いておき、神話は既に内面化されているという前提の上で、さらにどのような実践を行えば、人々をサクティが存在する現実(主

観的には正しい現実)に生きさせることができるのかを明らかにしたい。

## 第二節 現実の作り方

レンボガン島の人々の言説はサクティの存在をおおむね認めるものである。「サクティを信じるか？」という問に対して、否定的な答えをする者はいた。しかし、多くのバリ人がサクティを現実存在するものと考えている。そして、彼らは真顔でサクティの効能とその素晴らしさを語る。

バレットウガを訪れる者は、必ず事前に水浴びをして身を清めておかねばならない。なおかつインドネシアの伝統的な衣装であるサルーンを着用し、その上にしっかりと帯を締めねばならない。そのようにして初めて花びらや清水を用いた瞑想を行うのである。これらの決まりや手順は、バリ・ヒンドゥーの儀礼そのものである。バリ人が生まれた頃から自然に受け入れてきた行動様式である。バリ人は既にバリ・ヒンドゥーという文化(物語)に呪縛されているのである。病気治しの営みの背景には明らかにバリ・ヒンドゥーのコスモロジーが控えている。

そしてタンカスはその物語にさらに彩りを加える。バリの神話における聖獣バロンや魔女ランダといった神々もまた、サクティと呼ばれる超自然的な力を持つとされる(吉田 1993:123)。タンカスはサクティを実際に使うことができるという。患者は期待と不安の入り交じった複雑な心境でバレットウガを訪れる。

タンカスはバレットウガにおいて静かな笛の音楽をラジカセで流す。そうすることで、精神集中に適した環境を作っている。線香の匂いが漂う中、人々は瞑想をし、意識を集中させマントラを唱え始める。

催眠に関する専門用語において、1つの事物に

注意を集中することを「注意集中」という（恩田 1978:131）。注意集中は催眠導入時に使われる方法である。パリ人は日頃から儀礼を通して瞑想をする機会が多く、我々日本人に比べて比較的容易に催眠状態に至ることができると考えられる。

催眠状態は催眠性トランスとも呼ばれ（恩田 1978:126）、変性意識状態の一種とされる（門前 1999:293）。変性意識状態とは宗教体験などに多くみられる現象であり、英語で Altered States of Consciousness（略してASC）と表記される。変性意識状態とは文字通り意識が変容した状態であり、通常の意識とは異なる。禅の研究者である恩田彰はその特徴を「覚醒とも生理的、心理的に区別」されるとし、この状態について「特殊な注意集中の状態、日常の意識とはちがった意識状態が現れ、心身の弛緩が生ずる。被暗示性が高まり、心の内面への感受性が強くなる。運動、記憶、思考、感情、行動などに変性が見られ、イメージが展開し、想像力や直感力が促進する。また自律神経機能が変化し、心身のひずみが開放され、心身の安定がえられる」と述べている（恩田 1978:126）。

マントラを唱え、花びらを指に挟んで行う瞑想は約20分間に及ぶ。患者は瞑想の後、軽い恍惚状態に陥る。変性意識状態と表現されるこの状態では、被暗示性が高まり、幻覚や幻聴が現われやすく、自然治癒力が高まる。サクティをもちいた実践はこのような時になされるのである。

まず初めにタンカスは患者に向かい合うようにして座り、自分の顔を患者の顔に近づける。そしておもむろに目を閉じ、何かを探るような仕草をする。患者はその間目を閉じている。しかし、体躯の良い大男が顔を近づけていることは気配で分かる。

大仰な身体動作が始まるのはこのすぐ後である。タンカスはマントラを低い声で唱えつつ瞑想をし右手をさしあげサクティを掴む。患者は目をつぶっているのでタンカスが何をしているのか知ることができない。しかしタンカスの息づかいは荒く、時折聞こえる「ウッ！ ウッ！」という呻き声はある種の恐怖心を患者に喚起する。それとともに、患者はこの場の特殊性を意識せざるを得ない。タンカスは絶えず筋肉を緊張させ息を止めつつ動作する。患者の目や鎖骨のあたりに線香を近づけ、患者のすぐ近くでマントラを低い声で早口に唱える。患者は目をつぶっている。しかし、線香の熱さを確かに感じ、頭の中では緊張と不安が錯綜しているはずである。

タンカスの治療は約20分間続く。患者が恐る恐る目を開けると、汗だくになったタンカスが目の前にいる。息を弾ませタンカスは、ジョッキで運ばれてきた水を勢い良く飲み干す。自分になされていることが特殊なことであることに患者は気付く。目を閉じてひたすらタンカスに身を任せるのは不安である。しかし、治療が終わると、患者の中にはある種の清々しさが生まれている。

タンカスのパフォーマンスの特徴は「荒い息づかい」と「洗練された身体技法」である。治療中には絶えずタンカスの息づかいが聞こえている。それは聴く者に対し、恐怖と畏怖がないまぜになった複雑な不安感を与える。そして、両腕だけでなく、足も頻繁に利用したタンカスの動きは豪快である。両足を震わせつつ次第に股を開き、右手を勢いをつけてかざす姿にはただならぬ雰囲気を感じる。

タンカスの動作は俗な言い方で言えば「カッコいい」のである。バレットンガで呪術を学ぶ者は大勢いるが、タンカスのポーズに勝る迫力のある動作をする者は助手のカデツを除き1人もいない。

タンカスの動作はイルムやサクティの知識を持っていない人間が見たとしても、十分威圧感を感じるものである。それは卓越した格闘技の演舞に似ている。タンカスの目つき、腕の張り具合、両足の間隔、腰の位置、そしてあたかも何かを乗り移らせたような右手の動き。タンカスの動きは見る者を魅了する。その迫力と威厳に満ちた動作は、何らかの力の存在を感じさせずにおれない。

患者の病気を治すだけならば、上記のパフォーマンスだけで十分である。しかし、サクティに現実性を付与するためには、もう一工夫必要である。病者の病が癒えたという事実は周囲の者にサクティの威力を認めさせる。しかし、それは変性意識状態を引き起こしやすい環境を整え、患者自身に備わっている自然治癒力の活性化によってもたらされた癒しであり、サクティという力がなくとも引き起こすことは可能である。サクティが確実に存在すると思わせるためには、身体を伴った計画的な戦略が必要である。バレットンガにおいてより重要なのは、サクティを現実存在するものであるかのようにふるまい、そのことに何の疑いも持たせないようにするタンカスと助手の連携である。

カデツ・ジャランコンはタンカスの助手的存在である。バレットンガにおけるサクティに関わる身体的な出来事には全て彼が絡んでいる。前述の病気治して使用されるサクティのうち<ククワタンウパス>を最初に右腕におろしたのはカデツである。また<事例1>のチェックにおいて、タンカスがサクティを込めたモノを最初にチェックするのも必ずカデツである。そして<事例4>のブ克蘭・アジ・ハリ・リントール・サクティにおけるサクティ照射の練習において、天井に吊された棒にサクティがうまく込められたか否かを判定するのもカデツである。さらに<事例5>のサク

ティの受け渡しにおいて、サクティを右腕に宿らせそれを与えようとするのも必ずカデツである。そして、初心者にブラフマンやウィシヌのサクティを与える前後に行うチェックも全てカデツが行っている。このようにカデツの動作や判断によってサクティの存在が証明されているのである。

ククワタンウパスなるサクティは、実はタンカスがある場で突然思いついて皆に教えたものである。左目と頬に痛みを訴える患者の治療を始める直前にタンカスは急に立ち上がり、助手のカデツを祭壇の前に呼び、ククワタンウパスをおろさせたのである。その途端、カデツは顔をしかめ、うなり声をあげ息を弾ませ始めたのだ。

<事例1>の、筆者がサクティを込めたケースにおいては、あたかもサクティが入っているだけでなく、さらにそれが普通のサクティではないことをカデツは演じて見せたといえる。これは高等な計算である。しかし不可能ではない。参与観察をしている筆者をサクティのある現実に取り込もうとしただけでなく、周囲の者のサクティに対するリアリティをも強化したのである。

<事例4>のブ克蘭・アジ・ハリ・リントール・サクティの照射においては、カデツは筆者を含め4人の男が込めたサクティをチェックしなければならなかった。最初に、タンカスの息子が天井に吊された棒に向かってサクティを込めた。カデツはそれをチェックし終わった後、棒に向かって右手で罰印を描いた。こうすることで先ほど込めたサクティを無効にすることができるというのである。ブアン(buang)と呼ばれるこの行為を行うのもやはりカデツだけである。

カデツは多いときで一晩に7回はじけ飛んでいた。他人が込めたサクティをチェックするたびに彼は瞑想をし右手を差し上げ、体中の筋肉を緊張させ勢い良く対象に向かって右手をかざす。サク

ティが入っているのならば後方へ吹き飛ばされるのである。カデッがチェックの体勢に入ると、周囲の者はカデッが飛んでくることを考えて場所を空ける。そしてカデッはその空いた空間にはまるように正確に体を飛ばすのである。左後方はパレトウガの敷地外であり、右後方にはタンカスや我々が避難している。

初めてパレトウガを訪れた初心者の青年は吹っ飛んだのではなく、フラフラとよるめいて気を失った。カデッが派手に吹っ飛ぶのとは異なる。サクティに対する恐怖と場の特殊性からくる極度の緊張が、彼を気絶させたと考えられる。しかし、この出来事さえもパレトウガにおいてはサクティのなせる技（リフレクト）として語られ、サクティという力の実在性とその威力を証明することになる。

初めて治療に携わった筆者の前に座り「どうだった？」と笑顔で尋ねてきたカデッのその演技には迫力があつた。嘘などありえず、そうでしかない現実を問答無用に押し付けてくるのである。カデッのセリフに対してついつい筆者も「熱かった」と答えてしまう。

複数の人間が場を共有している場合には常に暗示効果が起きているといえる。一人一人の挙動がその場のルールや価値観、意味を伝達し、人々は絶えず無意識にそれに気を配り、それに合わせた行動をしているのである。心理学者の成瀬悟策はこのような過程を「ひとが他人の言動に関心を抱き、人間関係を保ち、社会的行動を成立させる基本要因の1つ」と述べている（成瀬 1986：269）。人間が社会を形成し、意味に縛られる存在である以上、この暗示効果は避けて通れぬものである。パレトウガにおいて、筆者もチェックを行う機会が何回かあつた。カデッのように天井に吊された棒に走り込んで行うチェックではなく、

誰かがサクティを込めたモノ（花びらや時計）を左手に置いて行うチェックである。通い初めて間もない頃はチェックをしても何も感じることはない。しかし、何週間も経つと、握った左拳に右手をかざしながら「熱い！」と言いたくなってしまうのである。そう言わざるを得ないような周囲からの圧力を感じるのだ。このように、パレトウガには集団における暗示効果が常に働いているのである。

カデッがサクティに関わる全ての出来事に関与するだけでなく、タンカスはその他の方法を駆使してサクティとは異なった方法で自らに神秘性を付与しようとしている。例えば、タンカスはパレトウガで皆が談笑にふけっている最中に、突然目をつぶり顔をかたむけ何かを考え込んでいるようなそぶりをする。そしてしばらくすると何事もなかったようにまた会話に参加するのである。不思議に思った筆者が理由を問いただすと、タンカスは「ジャワにいる師匠が話しかけてきた」と答える。これも計画的に皆の目の前で行っているように思える。そうやって人々の感心を引き、質問されるとさも当たり前のようにさらりと答えるのである。大仰に披露するよりも、この方が周囲に与える印象は強い。

また、タンカスはサクティを込めた棒を使い、その力の威力を示そうとすることもある。棒を左掌の中指に沿って押しつけ、左手首に右手の親指と小指を置かせ、その2つの指の一方を手首につけたまま、もう一方の指を思い切り伸ばす運動を数回繰り返させるのである。右手の小指で左手の中指の先に触れた後、小指を左手首に戻し、今度は右手の小指を左手首に残したまま、右手の親指で左腕の中頃を触れてくるという動作を繰り返させるのである。そしてその後で、棒を取り除き、右手と左手を重ね合わせ、左手の中指が右手の

中指よりも数センチ高くなっていると「サクティの力だ」と述べるのである。明らかにこれは錯覚である。左手の中指は右手の中指よりも物理的に伸びてはいない。

以上のことから次のことが言える。パレトウガにおいて、呪術師であるタンカスとその助手カデッの計算された演技とパフォーマンスにより、超自然的な力であるサクティにリアリティが付与されている。それはイルムやサクティという言葉があらかじめ膾炙しているバリであるからこそ可能となる芸当である。

しかし話はそう単純ではない。タンカスやカデッの行動に演技くさを認める反面、筆者は彼らが嘘を付いているようにも思えないのである。もしかすると、タンカスやカデッは現実が作り出され得ることを十分承知していながら、作り出された現実に自ら進んで呪縛されるという器用なことをしているのではないだろうか。

### 第三節 呪縛

(1) 箸をご飯に突き立てる。(2) 北を枕にして眠る。(3) 靴を履いたまま部屋に入る。(4) 霊柩車に遭遇する。以上に列挙した4つの行為はある文化圏において禁忌とされるものである。これらの行為がタブーとされている理由を説明することは可能である。例えば、(1)については「箸をご飯に突き立てることは霊前に供えるときになされる格好である。そのため死を思わせる。したがって特別の場合を除きそうすることは禁止されている」というような説明がなされる。また(2)については「北枕は死者を安置する仕方だから」、(3)については「靴は汚いから」、(4)については「霊柩車は亡くなった人を運ぶ車だから」という説明がなされる。

しかし、(1)の場合、供物をどうしてそのよう

な方法で霊前に捧げるのかという疑問が残る。ご飯に箸を立てて霊前に供えるから、ご飯に箸を立てることが死を連想させるのだろうか、それとも、ご飯に箸を立てることが死を連想させるから、霊前のお供え物がそういう形態を帯びるのだろうか。同様に(2)の場合も、北を枕にして死者を安置するから北枕は不吉とされるのか、それとも、北枕が死を連想させるから死者をそのような仕方で安置するのだろうかという疑問が生じる。このことは他のケースにも当てはまる。

しかし、この疑問はひとまず保留しておく。重要なのは「ある行為」に対して「快・不快の感覚」が自動的に引き起こされてしまうという事実である。「箸をご飯に突き立てる」という行為に遭遇すると「否応なしに嫌な気分が襲われる」という構図が大切なのである。

「箸をご飯に突き立てる」ことに対する意味付けは文化ごとに異なる。別の文化においては「箸をご飯を突き立てる」ことは取るに足らない出来事かもしれない。しかし日本において、この行為はむやみやたらに人前でしてはならないものである。

サクティにも同じことが言える。あるポーズを前にするとバリ人は特定の感情・感覚を喚起させられる。「右手を差し上げ目をつぶりマントラを唱えた後で勢いよく右手をかざす」という行為を目にした途端、バリ人の大部分は押さえようのない体感に襲われるのである。その体感は文脈によって恐怖や悪寒、そして熱感であったりする。

上記のような「ある行為」に対する「反応」は学習されるものである。したがって、バリにおいて、いくら右手をかざされても何の変化も生じない人間がいるのは不思議なことではない。学習していない人間にはサクティは効かないのである。おそらく、レンボガン島の19歳の青年は、サク



ティやイルムについてある程度の知識は持っているが、それらに完全に呪縛されていなかったために、サクティを使ってきた男をたたきのめすことができたのだらう。

しかし、喧嘩に勝つためならサクティに関する「刷り込み（ある動作に対して不可避的にある感情が生起すること）」が行われない方がいいように思える。バレットウングでサクティに関する実践を積み積むほど他人の特定のポーズに対して反応してしまうようになるからである。これは自ら進んで弱点を開発しているようなものである。

ところが、ある行為に対してある感情が生起するのを止めることができないのは我々も同じである。ご飯に箸が突き立てられている光景を見た老女はこの重大さにあわてふためいて気絶してしまうかもしれない。さらに、特別な行為を目前にしたときだけではなく、このような現象は本来日常的に起こっているのである。

例えば、誰かに「死ぬ」と言われたとする。日本語を話す人間ならば、何らかの感情がすぐに生起するはずである。「好き」と言われても同様に日本人は何らかの体感を得てしまうはずである。つまり、日常生活における言葉のやりとりにも、サクティに対する不可避的な体感生起現象と同様のことが起きているのである。

また、笑顔を見て嬉しくなるのも、文化的に笑顔という顔の形が喜びを生じさせるよう仕組まれているからに他ならない。笑顔を見るとある特定の体感（例えば喜び）が生起するのである。同様に、サクティの放出動作を目の当たりにした時に生じる体感（例えば恐怖）も、文化的に構築された「記号と体感の結びつき」によって生じさせられたものである。笑顔に対する反応は「記号（眉をうえに上げ口を横に開くという行為）と体感（喜び・快）」の結びつきによって生じ、サクティに対

する反応も後天的に学習され刷り込まれた「記号（右手を差し上げ目をつぶりマントラを唱えた後で勢いよく右手をかざすという行為）と体感（恐怖・不快・熱感）」の結びつきによって引き起こされるのである。そして、作り出された「記号と体感の結びつきの構図」はそれに呪縛された者にだけ作用する（理解される）のである。

したがって、次のことが言える。現実（リアリティ）は臨場感と同義である。否定しようがない体感を得てしまえば、それがどんな虚構じみた営みの中で起こったことだとしても、当事者にとっては紛れもない現実なのである。つまり、虚構と現実是对立しないのである。むしろ、虚構が現実そのものなのである。靴を履いたまま部屋に入る人を見て不快感を示すことに何の不思議があるだろうか。作られた虚構にすぎなかった現実が、しっかりと人々をしてある種の体感を感じさせしめているのである。虚構であるからといって、誰もその虚構を否定することはできない。虚構が現実なのである。

誤解を避けるために、虚構と現実に対立する概念として、事実(fact)があることを示しておかねばならない。事実とは例えば、水は酸素原子と水素原子から構成されているといった普遍的で物理的な命題のことである。いくら頑張っても水は炭素原子では構成されえない。仮に、あたかも水が炭素原子でできていると人々に思いこませ、そのことに現実感を与えることができたとしても、事実という観点から見れば、普遍的に水は酸素原子と水素原子から成り立っているのである。どうあがいても水でダイヤモンドを生成することはできない。

バレットウングにおける営みは、サクティという文化的に構築された意味に関するものであった。そこでは、タンカスという呪術師と助手であるカ

デッが、サクティというものを存在させるべく戦略的に動いていた。彼らは変性意識状態に至らせた患者に大仰なパフォーマンスを用いて暗示をかけることにより、患者自身に備わっている自然治癒力を活性化し、実際に病を癒していた。そうすることで、サクティの絶大な威力を周囲の者に示していた。そして同時に、サクティに関する具体的な実践において吹っ飛んだり熱がったりすることにより、サクティの存在に現実味をもたせていた。おそらく2人は、意味は作ることが可能であることを知っているのであろう。そして、それが確固たるリアリティを形作り、絶対的な臨場感を感じさせることも了解しているのだ。

しかし誤解してはならない。彼らは彼ら自身が演出し作り出したサクティのある現実を、努めて信じているわけでは決してない。先ほどから、演技や戦略という言葉で彼らの行動を説明してきたが、彼らにとって呪術は「演じているか演じていないのか」「信じているか信じていないのか」という次元の話ではないのである。彼らにとって呪術は「感じるか感じないか」「あるかないか」という次元の話なのだ。重要なのは、作り出された虚構を現実として生きることのできる人間の能力である。つまり、彼らは「意図的に作った現実」に意図的に呪縛され、最終的に無意識的に行動している」のである。「意図的に呪縛される」という点に彼らの呪術師としての力量（技）がある。彼らは自分たちが作った現実に進んで縛られることのできる優れた哲学者だといえる。この技能こそ彼らが呪術師と言われる所以なのだ。演技や戦略といった側面はもちろん存在する、しかしその向こうには確固たるリアリティが控えているのである。

パレトウंगाでイルムを学ぶ者のうち、ドゥクンになることを明確に目指しているのはカデッドだけである。呪術師とは現実を作り出し、かつその

現実には呪縛されることが出来る相対主義的な絶対主義者なのだ。筆者は、いままさに現実を作り出すとする瞬間の彼らを見たときには、彼らを「演技的・作為的」と捉え、自らが作った現実のうち多く呪縛され、そして呪縛されていることを忘れて完全にもう1つの現実を生きることができた彼らに非演技性（真実性）を感じたのだろう。

## 第五章 結語

### 第一節 バリにおける現実

サクティという超自然的な力の存在を疑わないバリの人々の言動に筆者はいつも違和感を感じていた。嘘に決まっている。たとえ嘘ではないにしても彼らは騙されているのだ。いや。単に無知なだけかもしれない。そのような考えが絶えず筆者を捉えていた。しかし、彼らと生活を共にし、実際に呪術の技法を学ぶにつれて、筆者の考えは次第に変化していった。もしかしたらサクティはあるのではないか。さらに正確をきけば、バリの人々は実際にサクティを知覚しているのではないか、とさえ考えるようになっていった。

筆者がレンボガン島に初めて来た頃、呪術を学びたいという筆者の言葉に対して、インフォーマントであるマデッは「ブラックマジックではなくホワイトマジックを学びなさい」と真剣な顔をして諭してきた。彼の口調は極めて真面目なものであった。

初めて、ドゥクンであるタンカスに出会った時、筆者は彼に質問をした。瞑想をし、近くにあったマッチ箱に手をかざし、「サクティを込めた」と述べる彼に対して、「サクティとは何か」と尋ねた。タンカスは「神からもらった力だ」と答えた。筆者は「神とは何か」と聞いた。すると、「お前は愛とは何か説明することができるか？」と逆に尋ねられた。

もともとサクティなどというものは存在しない。にもかかわらず、サクティは存在せしめられている。バレトゥンガの人々はサクティのある現実を生きてしまっている。

しかし、筆者はどうしても彼らの現実に違和感を感じていた。例えば、呪術初心者には必ずチェックが行われる。初めてバレトゥンガを訪れた人に向かって、タンカスの助手であるカデッはサクティをぶつける。カデッは瞑想の後、拳を額に付け、全身の筋肉を緊張させて初心者めがけてサクティを放出する。2、3メートル離れたところから勢いをつけて走り込んでくるカデッを前にしたとき、筆者は心底驚いた。殴られると思い咄嗟に顔をゆがめた。しかし、カデッは筆者の胸の前で、あたかも壁があるようにある一定の距離を開けて止まったまま、呻き声をあげつつ右手をかざしていたのである。

それは筆者がブラフマンのサクティをタンカスからもらう前に行われた。そのため、カデッは筆者の体に自分のサクティをぶつけても何の反発も感じられなかったという。後ろから見ていたタンカスが「エンプティー」と一言つぶやく。

それとは対照的に、ブラフマンのサクティをもらった後の筆者に再度行われたチェックにおいては、カデッは派手に吹っ飛んだ。弾かれるようにして何度も吹っ飛んでは筆者に挑みかかってきた。「バグース(よし)」と後ろから見ていたタンカスがつぶやく。サクティが筆者に備わったということだ。

筆者は違和感を感じていた。演技なのだ嘘なのだ。自分から進んではじけ飛んでいるに決まっている。そう考えた。超自然的な力など最初から信じてはいない。彼らの営みはまやかしなのだ。サクティの授与と儀礼が終わった途端、筆者の体をチェックして吹っ飛ばなんて、あまりにも話が出来

過ぎているのではないか。彼らは演技をしている。それが筆者の出した結論だった。

しかし、全てが演技とは言えないことにあとで気付いた。演技をしているという自覚もないまま、彼ら自身サクティのある現実を生きてしまっている。もちろん、言うまでもなくサクティは虚構である。しかし、人間は虚構としか思えないような現実を生きているということを筆者はすっかり忘れていた。

現実には虚構から始まるのである。虚構でしかないサクティをあたかも存在するように振る舞うバレトゥンガの人々にとって、サクティは現実に存在しているといえる。これは矛盾ではない。意味や観念上のものが人間に強力な影響を及ぼしうることである。

日本にも現実として生きられてしまっている多くの虚構がある。例えば「北枕」や「霊柩車」がそうである。枕を北にして眠ることや霊柩車に行くわすことは不吉とされ忌み嫌われる。その理由は説明することができる。例えば、死にたいする恐怖が「霊柩車」を不吉にする、という具合に。しかし、「霊柩車」に遭遇しても何も感じない人がいるのは何故だろうか。このような人は「霊柩車

不快感」という図式に囚われていないといえる。つまり霊柩車に関する意味(霊柩車は死を象徴するために良くないものであるという命題)に呪縛されていないのである。ある種の人々はこれらのタブーに対してしっかりと不快感を感じるにもかかわらず、一方、「数字の7」や「茶柱」などは「北枕」や「霊柩車」とは異なり喜ばれ歓迎されるものである。これらの事象は対照的に快をもたらす。

サクティを放出する動作を目前でなされた場合、バレトゥンガの人々はある種の感覚が生起するのを止めることができないと考えられる。それは恐怖であったり、文脈によっては偉大なものに対す

る畏怖であったりする。そして、喧嘩といった殺伐とした状況において見せつけられたポーズは、ある人々にとっては重大な意味を持つ。その動作は強力で過剰しく使い方によっては人を死に至らしめるサクティという力を発動させるものである。そのことを理解する下地が構築されてしまっている相手は恐怖のあまり気絶するのである。脱カルトカウンセラーである苫米地英人の言を借りれば、サクティが効く人には「迷信的命題が刷り込まれている」(苫米地 2000:22)のである。したがって、サクティは万人に効くというわけではない。サクティは、サクティが何であるかを理解している人間にしか通用しない。サクティという観念が既に当たり前のものとして疑問の余地なく保持されていることが、サクティが威力を発するための条件なのである。

迷信的命題が力をもつことそれ自体には何の不思議もない。タンカスのバレットンガでイルムの修行に励むことは、自らもサクティの力に影響され、そしてその力を使うことができるようになることである。しかし、タンカスやカデッはサクティのある現実には呪縛されながらも、そのことを十分理解し、時には意図的にサクティに現実性をもたせているのである。

## 第二節 今後の課題

インドネシアに限らず、世界中にサクティと同じ意味の言葉があり、その超自然的な存在に基づいて様々な営みが行われていると考えられる。問題は、どうして人間はこのような虚構としか思えない現実を生きることができるのかという点である。生まれた頃からある一定の情報に浸され続けた結果、彼らにとっての世界観というものが形成されてきた。ただそれだけの話なのだろうか。意地悪く言ってしまうと、神は存在するという情報

しか得られない環境においては、それを前提とした世界観が作られてしまい、その世界観を疑うことなど不可能に近くなるということなのだろうか。

筆者はバレットンガにおける人々の営みをこれからも理解し分析していくにあたって、エスノメソドロジーの知見を活用していきたいと考えている。エスノメソドロジーは、社会学者であるハロルド・ガーフィンケルによって創始された学問領域である。ガーフィンケルは「話すこと」を重視し、そのこと自体が「ある状況について話すのに使われており、しかも当の状況を構成する1つの特徴」であると述べている(ガーフィンケル 1987:16)。さらに彼は「エスノメソドロジーとは社会のメンバーがもつ、日常的な出来事やメンバー自身の組織的な企図をめぐる知識の体系的な研究」であると述べている(ガーフィンケル 1987:17)。

エスノメソドロジーは日常生活における常識についての学問といえる。我々の生きる現実とは共同体の成員による言説や日常生活における諸行為によって作り出された虚構であるという立場をとり、虚構としか思えない現実がいかにして生きられるようになるのか、そのメカニズムを解明していくのである。通常エスノメソドロジーにおいては言説が重要視される。我々が生きている現実そのものを構築しているものがまさに言説だからである。言説などの実践によって作り出された現実生きる我々が、そのような現実を生きているが故にその現実に即した実践を行い、再び現実を作り上げていくという構図は、ガーフィンケルによってリアリティの相互反映性(reflexivity)と呼ばれている。社会学者の好井裕明はこのことを次のように表現する。「私たちのエスノメソッドは、個々具体的な場面における実践(プラクシス)として『社会構造』を作りだし、また、『社会構造』は次に続

く現実を行う土台となる。」(好井 1987: 316)ここでいうエスノメソッドとは「ある文化において慣習的に共同で行われている考え方や推論方法」であり、我々の多くはそれによって「ある特定のものの考え方や感じ方を繰り返し行っている」のである。しかし、そのことは滅多に気付かれないことなのである(好井 1987: 314)。

サクティというモノがあるという言説に基づいたパレトウガの人々の実践が、サクティの存在する現実を作り出しているということが、本論文で取り扱われた内容であった。サクティという言葉があってはじめてサクティのある現実リアリティを持つのである。しかし、筆者は言葉(言説)に加えて身体性、なかでも体感が現実を作り出すという点を強調したいと思う。言説によって構築されたコスモロジー(世界観)に基づく身体的な感覚が、虚構としか思えない現実に生きることを可能にしていると考えるのである。

以上の観点から、筆者は、サクティを現実存在するものとして扱うパレトウガの人々が、いかにしてサクティの存在する現実に生きることができるのかという課題にこれからも取り組んでいきたい。

#### 謝辞

呪術に関する論文を書くことができたのは、正味79日間にわたるインドネシア滞在中に、筆者を家族のように扱ってくれたカトゥール・ワルンの人々のおかげです。彼らの助力がなければ、呪術師に会うことさえできなかつたと思います。心より御礼申し上げます。

そして、理屈ばかりこねる生意気な日本人に深遠なる奥義を授けてくれた呪術師ワヤン・タンカスに感謝の意を示したいと思います。ことあるご

とに質問し、それを何度も繰り返す筆者は、彼にとってかなり厄介な存在だったに違いありません。本当にありがとうございます。

また、村の役場で働くワヤン・スミアリティに大変お世話になったこともここに明記しておきたいと思います。彼女からは政府刊行の村の調査書を貸して頂きました。

他にも、島中をバイクで案内してくれた中学校の英語教師ワヤン・ムダカ、テングサ作りを手伝わせてくれたニョマン・ウィニュー、インドネシア語を教えてくれたレンボガンリゾート勤務のソマンにもありがとうございますを伝えたいと思います。

さらに、呪術研究者として、様々な助言をしてくださった九州大学の関一敏先生に厚く御礼申し上げます。関先生は、調査の心構えを説いて下さっただけでなく、呪術に関する研究論文を多数提供してくださいました。繰り返し、厚く御礼申し上げます。

そして、関先生のお話をうかがう機会を与えて下さった北九州大学の重信幸彦先生に感謝の意を表したいと思います。

また、エスノメソドロジーに関する文献を快く貸して下さった北九州大学の須藤廣先生にも心より感謝したいと思います。

最後に、年末のお忙しい時期に時間を割いてまで論文指導をして下さった竹川大介先生に深くお礼申し上げます。

#### 註

(註1)バリ島での一回の食事代が5000ルピア(約63円)であることを考えると安いものである。

(註2)椰子の葉でできた900平方センチメートル程の容器にリンゴやバナナなどの果物やお菓が入ったものと、椰子の葉を加工して作った飾

りの二つを指す。前者の食べ物は儀礼が終わった後で皆に食べられ、後者の加工品は儀礼の最後に、あらかじめ木の枝で結びつけられていた葉と葉の部分、儀礼参加者に引っ張られて引き離される。(註3) テングサ労働の1ヶ月分の収入が20万ルピアである。この値段は高いといえる。

(註4) テングサを天秤でかついで小舟に積み上げ、それを遠浅の海に運び、海の底に杭を打ち付け、杭と杭をプラスチック製のみもで結び、そのひもにひとつひとつテングサを結わえていく作業である。テングサは重く、杭を鉄の棒で海底に打ち付けるのにはかなりの労力を要する。

#### 引用文献

好井裕明 1986 『エスノメソドロジー』 ハロルド・ガーフィンケル著 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳 せりか書房  
成瀬悟策 1986 「催眠」 『新版 心理学事典』 下中邦彦編 平凡社  
門前進 1999 「催眠」 『心理学辞典』 中島義明編 有斐閣  
恩田彰 1978 「宗教的行における催眠的要素」 『宗教における行と儀礼』 成瀬悟策編 誠信書房  
井上真 1995 「風土と地理」 『もっと知りたいインドネシア』 綾部恒雄・石井米雄編 弘文堂  
倉田勇 1995 「民族と言語」 『もっと知

りたいインドネシア』 綾部恒雄・石井米雄編 弘文堂

深見純生 1995 「歴史的背景」 『もっと知りたいインドネシア』 綾部恒雄・石井米雄編 弘文堂

内堀基光 1995 「宗教と世界観」 『もっと知りたいインドネシア』 綾部恒雄・石井米雄編 弘文堂

嘉原優子 1995 「バリ島の概観」 『神々の島バリ』 河野亮仙・中村潔編 春秋社

竹沢尚一郎 1987 『象徴と権力』 勁草書房

小池誠 1998 『インドネシア 島々に織りこまれた歴史と文化』 三修社

吉田禎吾 1993 『バリ島 祭りと花のコスモロジー』 弘文堂

浜本満 2000 「象徴と解釈」「呪術」 『文化人類学キーワード』 船曳健夫・山下晋司編 有斐閣

中村元 1979 『ヒンドゥー教史』 山川出版社

ミゲル・コバルピアス 1992 『バリ島』 平凡社

クロード・レヴィストロース 1976 『構造人類学』 みすず書房

スタンレー・J・タンバイア 1996 『呪術・科学・宗教』 思文閣出版

苔米地英人 2000 『洗脳原論』 春秋社